

國學院大學學術情報リポジトリ

Prise Articles : A Survey of Stories on the God of Poverty in Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hatori, Yusuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000495

日本における貧乏神譚の研究

羽鳥佑亮

はじめに

貧乏神とはおそらく誰しもが一度は聞いたことのある神の名前であろう。しかし、貧乏神について十分な考察を行なっていた研究はこれまでになかったように思われる。そもそも貧乏神に関する文献は少なく、先行研究はほとんどが厄神との関連から簡単に触れる程度のものであった。また、絵巻物からその姿を考察したものもあるが、それらは描かれたものの考察に留まり、貧乏神を総体的に考察したものではなかった。そのため本

稿では、幅広く貧乏神に関する材料を集めて考察し、日本においていかにして貧乏神の存在が捉えられてきたかを明らかにする。

なお本稿では貧乏神の定義を「貧乏神、もしくは別の表記で〈びんぼうがみ〉や〈びんぼうのかみ〉などとあらわされるもの、または取り憑かれていると貧しい状態になるとされるか貧しい者に憑いていると説明される人間ではない存在」とした。また貧乏神が登場する話は口承のもの書承のものを問わず、「貧乏神譚」とした。

一、先行研究

これまでの貧乏神についての研究は、大きく三系統で行われてきたといえる。

まず口承文芸における話型について解析したもので、加藤まどか氏は「貧乏神伝承の構造」^①において、貧乏神の登場する昔話の構成と分類から、行動と豊かさを得ることとの関連性、また、昔話における貧乏神のもつ役割について論じている。

次に貧乏神と厄神、殊に疫病神を近縁のものと捉え、ともに祀り上げられることで福神の性質に転じることに注目した研究がある。これらでは貧乏神は疫病神の一型であり、福神と両義性をもつことを強調している。大島建彦氏の「疫神と福神」^②や宮田登氏の「福の神・貧乏神」^③、紙谷威広氏の「福神と厄神」^④がそれに当たる。しかし、貧乏神と福神の間にある両義性は非常に限定的なものであり、貧乏神と他の厄神との相違点も明確にされていない。その点で若干の問題があるように思われる。最後に挙げられるのが、絵巻物や出版物の図像の形成に関わる研究である。「梅津長者」の絵巻やその周辺の話などから、貧乏神の図像の形成を当時の賤民の姿が関係しているとしたも

ので、塩川和広氏の「富貴への予言と福神・貧乏神——打出の小槌と柿帷子」^⑤や「お伽草子「福神物」に見る致福の構造——『梅津長者物語』の貧乏神を中心に」^⑥、また服部幸雄氏の「図像の創成——貧乏神と和合神」^⑦がそれに当たる。

またこの三つの系統をまとめたものとして、小松和彦氏の「福の神と貧乏神」^⑧がある。そこから貧乏神譚における貧乏神の役割や日本人の貧乏神に対する考えを明らかにしようとしたものであるが、福神に対する考察の延長ほどにとどまり、貧乏神の全体像については不十分ではないかと思われる。

先行研究では、それぞれの分野から必要な文献を抽出して分析が行われていた。本稿では文献のみに限らず、絵画資料も用い、それらに示された貧乏神の表記や姿、性格などの要素に注目しながら、日本人の貧乏神観の変遷について考察したい。

二、貧乏神の変化

(一) 江戸時代以前

◎ 仏教説話の貧乏神

貧乏神の登場する文献として年代が明確なものはそう多くはないが、冒頭で定義した「貧乏神」と認められる存在が登場す

る最も古い文献は、管見の限りでは、鎌倉時代前期の成立とされる鴨長明編の仏教説話集『発心集』である。その概要は、貧苦から逃れようと場所を移ろうと考えた三井寺の貧しい僧が、色あおり、痩せ衰え、わびしげな冠者が、自分と同じように藁靴を用意して出立つという夢を見た。僧が名を尋ねたところ、「貧報ノ冠者」であるという。夢がさめた僧は、自らの宿世を知り、心を改めて、粗末ながら、もとの寺に住んだということだ、というものである。

仏教説話として、宿世を題材とした話であり、不幸の理由づけとしてそれまでの仏教説話にもあった因縁が、「貧報の冠者」という存在にあると説明したものである。

初期の貧乏神譚は、貧乏であることが因果であると説明する仏教説話に顕著である。他にも、少し時代が下った鎌倉時代後期、無住一円によってまとめられた仏教説話集、『沙石集』^⑩に、こうした考えが基となっている貧乏神譚が出現する。尾州の貧しい僧、圓淨房は、弟子の僧と小法師に「長年貧しく悲しいので、貧窮を追おうと思う」と言う。十二月の晦日の夜に、桃木の枝を持ち、呪を誦し、「今は貧窮殿来なさい来なさい」と言いながら、これを門まで追いたてた。するとその夜の夢に、古堂にいる痩せ枯れた法師が、「年来仕えたけれども、追いなさつ

たので退出いたします」と言い、雨に降り籠められて、泣くのを見た。その後、暮らしは楽になった。貧窮も先世の業であるのに不思議なことだ、というものである。この貧乏神譚は、『発心集』よりも貧乏神の性格が克明に書かれている。

この中で注目されるのは「十二月晦日ノ夜」に「桃木ノ枝」で貧乏神が追い出されるということである。大晦日にものごとが転換するという話は、口承文芸においてもしばしば見られる。昔話「大歳の客」では貧者が大晦日を境に富を手に入れる。このように大晦日は「貧」と「富」との交換が可能であることを示唆した時間であるとも考えられる。「十二月晦日ノ夜」に貧窮殿が払われることは、こうしたものをふまえたものと考えられる。

また罪や穢れを除き去る儀式を行うのも大晦日である。「桃木ノ枝」によって貧乏神が追い出されるという内容は、桃に魔除けとしての効力があるという考えをふまえたものであると思われる。「貧窮殿」は払われるべき邪気の性格をもつとされたといえるであろう。

さらに『沙石集』には、前述の圓淨房の話にもう一話「貧窮殿」の話が続いている。ある貧しい者が他国へ落ち行こうとした夢に、痩せ枯れた小冠者で、藁靴をさばくる者がでてきた。

「何者か」と聞いたところ、「貧窮ノ冠者でございます。他所へ行くときに、御伴いたします」といった、という話である。『発心集』にある話の内容と酷似していることから、この話は『発心集』のものを基にして作成されたものであると考えられる。以上にあげた文献では、いずれも貧乏神は「貧窮ノ冠者」と呼称されており、これらは、当時の仏教説話の中では比較的良好に知られていたものであるということができよう。

さらに中世の文献を見ていくと、天台宗真盛派総本山西教寺にある正教蔵に納められた『因縁抄』^①が挙げられる。この文献は元々、草津市芦浦の観音寺の蔵書で舜興により寛永初年から万治にかけ収集、書写された天台宗聖教集の一部で、雑多な中世仏教の周辺部をなす書物を集めたものとされる。そのため正確な成立年代は未詳であるが、ここにも貧乏神についての話が二話収められている。そのうちの一つは三井寺の学匠の話で、『発心集』の内容とはほとんど同じである。

しかしもう一つの話は、内容自体は似ているものの、貧乏神の姿や行動がこれまでと異なって書かれている。五大院の貧僧の先徳は、坂東へ下るのに近江の馬場というところで、童十五人で行きあう。先徳が「汝は何者か、どこへ下るのか」と尋ねると、「我らは貧福神である。先徳は貧報だと奥へ下りなさる

ので、先に下るのです」と答えたので、先徳は山上へ帰った。(中略)王位より仰せられるほどの人であるけれども、貧苦からは逃れることはできない、というものである。

この話では、貧乏神が複数化していること、さらに童となって登場したことが新たな要素として挙げられる。また、「貧福神」というように、これらは神の一種とされている。『発心集』と同話の『因縁抄』のもう一話の中でも、「貧報神」となっており、『発心集』の「貧窮ノ冠者」という呼称から変じていることがわかる。ただし、『因縁抄』の二話の成立年代ははっきりしないため、編集の過程に書き換えられた可能性も否定できない。しかしいずれも、因縁による貧苦からは逃れられないという点は共通している。

◎貧乏神の降伏

中世末期から江戸初期に成立したと考えられ、異本が数多く伝わる「梅津長者」の絵巻の類にある話には、「ひんほう神」の姿がみられる。「梅津長者」類の話は伝本により大きく分かれ、その主人公の名前から「左近承系」と「小藤太系」とに分かれている。

左近承系の『梅津長者物語』^②には、貧乏神は「日ころは目に

見えざりし年十四はかりなるかふるとも」で「かみはかたのまはりにきりまはし、かきのかたひらをき」と書かれている。『因縁抄』の「貧福神」は複数で童の姿であったが、これに近いものである。

図1・2は、左近承系に分類される、国立国会図書館所蔵『梅津長者物語』の一部である。図1では仏法守護神の眷属である護法童子と貧乏神が組み合せて争っており、貧乏神が護法童子の対照的な存在として描かれているようである。図2で貧乏神は毘沙門天と思われる福神に降伏せられている。詞書では、毘沙門天は多くの眷属を引き具し、「あくまかうふくのさうをけんし」ていると書かれる。仏法守護の神であるとともに福神の側面をもつ毘沙門天が「福」の敵として想定された「悪魔」即ち貧乏神を降伏していると考えられよう。一連の「梅津長者」類の話にみられる貧乏神は、福神に追われる存在である¹³⁾。

このように、中世末期から江戸初期までの貧乏神譚には、貧乏神と福神が対立する特徴がみられる。慶長一〇年（一六〇五）に不干斎により著された『妙貞問答』¹⁴⁾には、ある人が吉田の神主に「神はあなたの思い通りに動くか」と聞くと、神主は「どのような神慮も引き寄せないことはない、祈念のことは何なりと仰せませ」と答えた。そこで、「私は生まれつき貧法ノ神の



図1 国立国会図書館所蔵『梅津長者物語』護法童子と貧乏神の対立。国立国会図書館デジタルコレクションより。

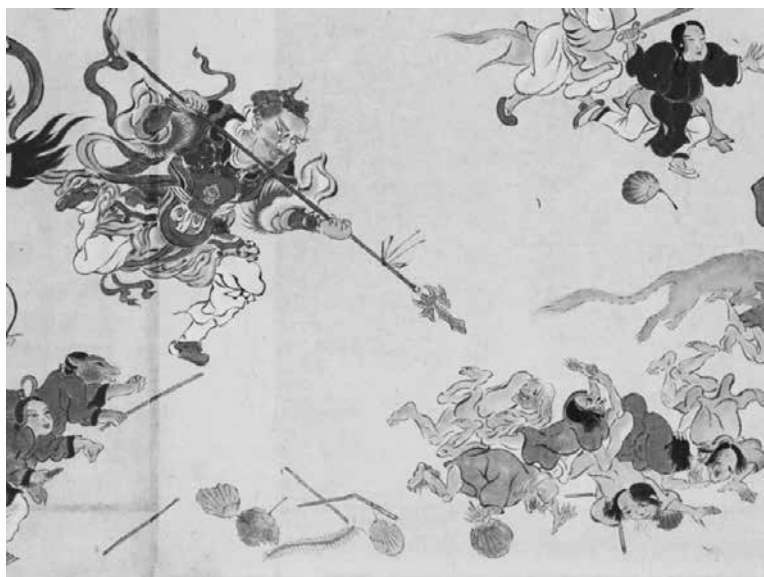


図2 国立国会図書館所蔵『梅津長者物語』毘沙門天（推定）と貧乏神. 国立国会図書館デジタルコレクションより.

加護は強く、福ノ神の利益にはあずからないので、貧法ノ神を払い福ノ神を勧請してほしい」と言った。すると神主は、白河院の何事も思い通りになったが双六の賽と賀茂川の水と山法師だけは思い通りにならないと語ったといわれていることを引き合いに出し、「ほとんどの神は思い通りになるが、貧法ノ神と福ノ神だけは思い通りにならないのだ」と答え互いに笑った、という話が載る。『妙貞問答』の話は、噂に聞いたこととして、登場人物の会話で語られる体裁をとるものであるため、その真偽は不明である。しかし、当時の神道の中心部に存在していた吉田家の関与する神であると考えられていたようである。

また、小藤太系「梅津長者」に属する、清水泰氏旧藏奈良絵本『梅津の長者』⁽¹⁶⁾の中の貧乏神の姿は、詞書に「そのかたち、まちまちなり。せいひくく、いろくろく、八つの手あしの、あるもあり、いろしろくして、あしは、ひとつあるもあり、とびのごとくにて、せいのたかきものもあり」とあり、さまざまな姿であると記されている。同様の表現として、『今昔物語集』巻第十六第三十二の中「怖ゲナル鬼共」の姿に、「或ハ目一ツ有ル鬼モ有リ、或ハ角生タルモ有リ、或ハ手数タ有モ有リ、或ハ足一ツシテ踊ルモ有リ」という記述がある。『梅津の長者』の表現と酷似しており、当時の人々は貧乏神を古典的な「鬼」

のようなものとして考えていたといえるだろう。

このように、中世前期から末期にかけて、貧乏神が仏教説話から離れるにつれ、取り憑いて仕方のない存在から、福神と対立する貧乏神になるというように、貧乏神の性質が変化していく様相が確認できる。これ以後、現在に至るまで、貧乏神は福神と対立するものであるという構造が、基本的には続いていると思われる。

◎貧乏神の表記と姿の変化

ところで、「貧乏神」という表記はいつからなされるようになったのだろうか。

天正一七年（一五八九）成立の『雄長老狂歌百首』¹⁸は、永雄長老の狂歌百首を撰集し、也足軒中院通勝が点を加えたものである。永雄長老は建仁寺住持、南禅寺十地をつとめ、和漢の典籍に通じた人物であるが、狂歌もよくした人物である。

この中で「初冬」と題された狂歌の中に「ひんほう神」がみられる。

偽のある世になりけり神無月ひんほう神は身をもはなれぬ（棒線筆者）

此比は所々の納所もいさ、かつ、ある比なれば、事にとりての貧報の神無月ともいはんか。但貴院は如何。

また「述懷」と題される狂歌の中に「貧報の神」とあり、点にも「貧報神」とある。

大きな柿打輪かな二三本貧報の神をあふきいなせん
柿團扇には貧報神のつくといへば、我等の果報にて、
二三本にてあふきいなせん事いかゞ、彌増長すべくや。（棒線筆者）

これらの狂歌では、表記はまだ「ひんほう神」や「貧報神」であるが、諸々の神祇が出雲へ赴くという「神無月」¹⁹にも貧乏神は人の身から離れないというように、取り憑いたら離れない存在であり、「柿團扇」には貧乏神がつくと理解されるようになっていたことがうかがえる。

元和元年（一六一五）に成立した安楽庵策伝による『醒睡笑』²⁰には、『雄長老狂歌百首』の「述懷」に元の話があると示された話がある。そこには「貧乏神」と表記されている。

「貧乏神」とわりなき知音の者有しかチト酒に酔て壁にもたれ居いねぶりしけるみぎりかたから物か何共和知レすととと落けり目をさまし手をあわせやれやれ嬉しい事や此年月肩に居たる貧乏殿かけふといふけふ落て我身をはなれたよと合點せしか誰いふとも知れず餘り多く寄合そちか居ねぶりする間油へうしを踏とて取はつし獨落にきいまたはてはないぞといへり何と心にいふてもせうしや雄長老

大なる柿うちはがな二三はん貧乏神をあふきいなさん也足の判柿團扇は貧乏神のつくといへは二三本にてあふく事いか、弥増に長すへくや(棒線筆者)

文献が少ないため心もとないが、ここまでの文献からは、貧乏神の表記は、多数を占めていた「貧報神」から「貧乏神」へと近世初頭までの間に変化しているといえる。この後、黄表紙などの中では「びんぼう神」などと表記されることもあるが、『日本永代蔵』や『譚海』などをはじめとして、江戸時代以降、現在に至るまで「貧乏神」という表記が主流になっていく。

このように、貧乏神の表記は移行期の例外はあるものの、基本的には「貧窮」から「貧報」を経て、「貧乏」が定着していったといえる。⁽²²⁾ 室町時代中期頃の成立とされる『節用集』(文明

本)⁽²³⁾ には、「貧窮―報―乏(中略)―福」と書かれており、その時点では既に全ての語が使用されていたと考えられる。

それでは、なぜこのような名称の変化がおこったのであろうか。貧乏神はもともと、仏教説話集に登場する存在であった。仏教説話では物事や事象は因果応報によるものとする。貧しさもまた、報いであると解釈される。貧乏神の登場は因果応報の結果であるため、「貧報」と表記されたのではないだろうか。⁽²⁴⁾ 「貧報」という表記をとる貧乏神譚には、「宿世ノホド」(『発心集』)、「貧福共二三世ノ業因、二遍アリ」(『因縁抄』)、「我等の果報にて」(『雄長老狂歌百首』)といった、仏教の因果応報の論理に基づき記述がみられる。

『雄長老狂歌百首』の狂歌の時点では因果応報の結果とする「貧報」の表記だが、『醒睡笑』では、作者が浄土宗の僧であったにも関わらず、『雄長老狂歌百首』の引用部分の表記は「貧乏」へと変化している。貧しさと因縁との関係性が希薄になり、さらに、話そのものの持つ役割も、因縁を説く目的から笑いを主としたものへと変化したため、「貧報」という文字を使わずに音の近い「貧乏」という語をとったと考えられよう。⁽²⁵⁾

ところで、『醒睡笑』には、貧乏神の新たな特徴として、「居いねぶりしけるみぎりかた」から落ちると書かれている点があ

げられる。また『雄長老狂歌百首』には「片思」と題された狂歌の「ひんほう」そのものも、「ひんほうはかたにつきたる」と書かれている。

ひんほうはかたにつきたる片思ひおもひもつかぬ人は

ことほり（棒線筆者）

身の程を觀せられたるは尤也。

こうした類似点や、『醒睡笑』には『雄長老狂歌百首』の「述懷」が引用されているように、作者の安樂庵策伝は『雄長老狂歌百首』を読んでいたと考えられる。ここから、『醒睡笑』における貧乏神譚の部分は、「片思」の「ひんほう」そのものを貧乏神と解釈し、「肩」につくという点を残しつつ、狂歌そのものが発展し、笑い話へと変化したものと思われる。

これと似通った語は貞享三年（一六八六）成立の『古今百物語評判』にも書かれている。ここでもやはり貧乏神は「肩の上」から落ちることになっていて、「五寸ばかり成物」「人形にて目鼻口舌も、そろひたり」と具体的な姿を与えられている。「肩」についている貧乏神は、五寸ほどの小さな姿である。さらに、主に儒教から見た合理的解釈や、中国の貧乏神に似た存在を紹介

介する故事を載せている。このように、『雄長老狂歌百首』から『古今百物語評判』の三話にかけ、物語が発展している。

(二) 江戸期以降の貧乏神

貧乏神は江戸時代になってから、新たに要素を得、それまでとは全く別の性格をもつものへと変化を遂げる。

◎ 祀られる貧乏神

元禄元年（一六八八）井原西鶴による浮世草子『日本永代藏』⁽²⁸⁾の「祈る印の神の折敷」がある。これは、染物屋の夫婦に貧乏が続いたことから考えが変わり貧乏神を祀ったところ、枕元に貧乏神が現れ、祀られた恩に貧しさを長者に譲りわたすという御告げとともに、良い染物の示唆を授けられたのでその通りに努力した。すると、繁盛し金持ちになった、という話である。創作物として認識されたものではあるが、貧乏神の祀り上げが行われる。

この中（図3）では貧乏神を「をかしげなる藁人形」として作り、「身に洪帷子を着せ、頭に紙子頭巾を被らせ、手に破れ団扇を持たせ、見苦しき有様」にして「元日より七種迄」、祀り上げている。「藁人形」に飾りをして祀ることは、疫神や疱

図3

東京都立中央図書館特別文庫室所蔵『日本永代蔵』にある挿絵。左が貧乏神を模した藁人形と思われる。『新潮日本古典集成 第九回』日本永代蔵』新潮社、一九七七。同書より転載。



瘡神を送り出す習俗にもみられることから、貧乏神が疫神や瘡神と近縁のものとして理解されているといえる。この認識は、以降に行われるようになったといつて良いだろう。「洪帷子」や「破れ団扇」をもつのは「梅津長者」類にもみられたことだっ

たが、祀り上げの期間が「元日より七種迄」であるのは種々の昔話にある元日前後に様々な奇異のことが起こるという定石の型を基としており、福を授ける「御霊夢」もある。この中には当時の様々な習俗が散りばめられているともいえる。なお、貧乏神そのものに關しては、文中に「悪さする子供を叱るに、『貧乏神め』と当て言を言はれながら³⁰⁾とあるように、民間では既に広く認識された存在となっていたことが推測される。

その性格は「我は元來その家の内儀に付いて廻る神なれば」とあり、様々な家を行く存在であることを暗示している。それまでの仏教説話において貧乏神という存在は、因果によるものであり、そこから逃れることは非常に難しいものとされていた。また、「梅津長者」でも福神数柱でようやく追い出される存在とされた。『醒睡笑』などでもしつこい存在とされ、あまり動くことがないという特徴がみられた。しかし『日本永代蔵』では、「分限なる家に不断丁銀掛ける音耳に響き、瘡の虫が起れり。鴨鱸・杉焼きの至り料理が、胸につかへて迷惑」や「夜は蠟燭の光り、金の間に映りてうたてかりき」など、種々の「贅沢品」を嫌い、「貧なる内の燈火、十年も張り替へぬ行燈のうそ暗きこそよけれ」と、貧しいことを好み、祀り上げのみで貧しさを別の所へ移すという特徴がある。これらはそれ以

前の貧乏神譚にはみられなかったことであり、以前の貧乏神とは大きく変化した存在であるといえよう。仮にも「神」であるという「貧乏神」という名前のせいで富や福を与えることもあると解釈され、変化したということができる。害を与えるものはしばしば福をも与えるという発想は、貧乏神に限っていえば、この頃からのものだったのではないだろうか。もとななる出来事があったとしても、あくまで創作物として認識されたことには考慮しなければならない。なお「贅沢品」が嫌いであるということは、後世の『軽口御前男』にも引き継がれる。^③

また、この時期から貧乏神を、仏教や神道の体系にある神として解釈することが行われ始めているようである。元禄十一年（二六九八）、横島昭武によりなされた『書言字考節用集』^④には、「黒闇天女名ハ黒耳女。世ニ云貧乏神是」とあり、黒闇天女と貧乏神は同一のものとされている。黒闇天女とは、仏教において吉祥天の妹とされる天女であり、また常に吉祥天と行動を共にすると説かれる存在である。性質は吉祥天と反対で、顔は醜く、行く先々で功德を奪い、人々に災禍を与えるとされ、密教では閻魔王の妃とする。^⑤ 貧乏神を仏教にあてはめた解釈をしている。さらに、寛政元年（一七八九）に刊行された新井白蛾の随筆『闇の曙』^⑥には、神道者の碓井何某の伝える「貧乏神を除

き去の祭法」がある。それによると、「一日食渴神、二日貪欲神、三日障礙神此三ツを合せて総名を貧乏神といふ也」とされ、貧乏神を神道の論理にあてはめた解釈をしている。この祭法は「神道家の秘伝といひしかども、予つら／＼其祭法を見るに、釈氏に吉祥天を祭るの法有。全くそれより出たるものならんともはる、也」とする。^⑦ この祭法に沿った貧乏神を払う呪術が当時の神道家の間で行われていたことが示される。これらのように、貧乏神は合理的に説明され、古くから伝えられたものとして考えられていたことがうかがえる。

◎貧乏神と教訓的要素

寛政七年（一七九五）頃、江戸の津村正恭によって書かれた随筆集『譚海』^⑧には、実際にあったこととして貧乏神譚が書かれる。作者の叔父が昼寝をしたところ、老人が座敷から入り二階へ上がるという夢を見た。その後は何事も思い通りにならぬことが続いたが、四年を経て昼寝をした夢に、貧乏神と名乗る先の老人が現れ、出て行く由と焼味噌を用いて貧乏神を家から出す方法、また焼味噌と生味噌を忌むべきことを告げた。その通りにしたところ貧乏神がなくなつたという話である。この中で貧乏神の姿は「乞食の如き老人纏纏にて座敷に入來

り」⁽³⁹⁾と記され、焼味噌を用いて貧乏神を追い出す呪術が明確に記されるという特徴がある。

主人公が貧乏神を追い出す「呪術」としては、『沙石集』に桃の枝を用い、真言のなにか陰陽の法を知り、貧乏神を追い出すものがあつた。しかし『譚海』では、「焼味噌」を貧乏神が好むとして、「焼めしに焼みそを少しこしらへ、をしきにのせ、うらの戸口より持出て、近き川へ流べし」という貧乏神を送り出す呪術が書かれる。この方法から、貧乏神の送り出しには、疫神送りの習俗が基層にあるものと考えられる。

また、「焼味噌」や「生味噌」は金との関わりが強いものであつた。民間の諺の中には「生味噌食いは財産つぶし」「焼きみそは恵比寿様がいやがる」「焼きみそ三年すれば貧乏する」⁽⁴¹⁾とあるように、焼味噌や生味噌は忌むべき食物であつた。この背景には味噌の浪費を戒める教訓があり、味噌汁にするよりも多くの味噌を使用することに対する戒めがあつた。

江戸後期に松葉軒東井によつて編まれた諺語辞典『譬喻尽』⁽⁴³⁾は、天明六年(一七八六)の序文を持ち、寛政一年(一七九九)頃まで増補されたものである。俚諺を中心とし詩歌、童謡、流行語、方言などまで広く集められ、刊行年代はちょうど『譚海』と同時期である。ここでは「焼味噌」を用いるものとして次の

ような諺があげられている。

焼味噌を好者は金得延ばさぬ

是餅箔屋語也 箔打焼味噌忌也 箔不延云云

焼味噌を好む者は金箔を延ばすことができない、そこから、焼味噌を好んで食べる者は、身代を増やすことができず貧乏する、という意味である。⁽⁴⁴⁾また『譬喻尽』には、これとは別に焼味噌を用いた言葉が紹介され、その注に「又焼味噌好者雖招貧……」とあり、やはり焼味噌は貧しさを招くものとしている。

焼味噌と金との認識はかなり広まっていたらしく、寛政元年(一七八九)の黄表紙『孔子縞于時藍染』にも「やきみそをやくと金がにげるといへば」という記述がある。

『譚海』の貧乏神を送り出す呪術の方法は、こうした戒めや諺、俗信が反映されたものであるといえるだろう。

さらに、文化一〇年(一八一三)に成立した海保青陵による『稽古談』⁽⁴⁵⁾は、経世書であり、武士が商業を賤しむ考えを非難する経済論を記したものである。ここに、大阪において焼味噌による貧乏神の送り出しを行ったと想像させることが書かれている。大坂のある家では「貧乏神ハラヒ」を行っており、それ

は「旦那ノ第一ニ好ムモノハ金銀ニテ、第一ニイヤガルモノハ貧乏神ナリ」と家の者に思わせたり、「家内一統皆貧ヲ嫌フト云フ家ニナルナリ」という効用があつたりすると分析している。その「貧乏神ハラヒ」の方法はやはり焼味噌を用いるものである。さらに、海保青陵にとつてこの件は印象に残つたものであつたらしく、『稽古談』と同じく海保青陵による『論民談』⁽⁴⁶⁾にはその方法がさらに詳しく書かれている。

大阪ニテハ其家ノ番頭自身ニ臺處へ出デテ焼味噌ヲ二ツヤク、焼味噌ハ貧乏神ノ好ム所ナリト云傳フルコト、コレ又送窮ニハヨキ道具ナリ、マヅ焼味噌ヲ法度ニスルコト術ナリ、蕎麥ナドノトキニ焼味噌ヲヤカネバナラストキニハ、庭ノスミナドニ出シテヤカスベキ也、(中略)焼味噌ノ臭ヲ貧乏神コノムトシタルモノ也、ソコデ月ノツゴモリニバカリ、臺所ニテ番頭ヤキミソヲヤキテ、貧乏神ヲ皆臺所ヘアツメルト云術ナリ、ソコデ二ツヤキテ、扱一ツノヤキミソヲバノケテヤキテ、一ツノ焼味噌ヲ手ニテワル也、ワリテクチヲアケサセテ臺處中ヲ持テマワルコト也、臺所ノコラス持テマワリテ、最終リニヤキミソノクチヲ堅クシメテ、ソレヲ川ヘナガス也、扱一ツノヤキミソヲモ又手ニテワリ

テ、坐敷ヨリ、見世ヨリ、居間・次ノ間・女部屋・男部屋マデ持テマワリテ、最終リニ口ヲ堅クシメテ川ヘナガス也、其番頭衣服ナドヲヨフハタキテ、味噌ノ臭氣ノナキヨフニシテ家ニ入ル、是送窮ノ式ナリ

同書によると大阪においてこの習俗はかなり広まっていたように、「大阪ニテハ富豪ノ家ニハ皆送窮ノ式アリテ」とある。これらの文献から、焼味噌を用いた貧乏神の送り出しは大阪を中心に行われていた習俗であつたといえよう。⁽⁴⁷⁾

ところで、文化一一年(一八一四)に根岸鎮衛の手によつて成立した書物『耳袋』⁽⁴⁸⁾には「貧窮神の事」として、牛天神の境内に社祠ができた由来と共に貧乏神の祀り上げを行ったことが説明されている。小石川に住む旗本が、貧乏ではあるものの他の憂いがないのは代々貧乏神の守護によるものとし、貧乏神を画像に描き、神酒や洗米などを捧げて祀り上げたところ幸があつた。この屋敷内に祀つたものを牛天神境内に移したという由来である。この「牛天神」は文京区にある北野神社のこととされ、「貧乏神の社」は「太田神社」とされている。⁽⁴⁹⁾

東京都文京区教育委員会によつて建てられた文化財の説明板によると、平成元年(一九八九)三月時点では天鈿女命と猿田

彦命を祀るが、もとは黒闇天女を祀り、合祀の高木神社は旧第六天町にあった第六天社を移したものであるという。『耳袋』には「貧乏神を画像にこしらえ神酒洗米など捧げて」祈ったとあったが、説明板ではこの貧乏神は前述の「黒闇天女」を祀っていたものであるとし、仏教的な解釈がなされている。しかし『耳袋』には、この祠が「貧乏神」として祀られていたことがうかがえ、一般的には「黒闇天女」よりも「貧乏神」として認識され、信仰されていたことがうかがえる。

◎知識人と貧乏神

文政八年(一八二五)成立の、滝沢馬琴らによって編集された『兎園小説』³³の貧乏神譚は、琴嶺興繼という人物が語ったものとして書かれている。この中の「窮鬼」と題された話には自ら「貧乏神」と名乗る神が登場する。「見るに年の齢は四十あまりなるべく、面は青く又黒く、眼深くして世にいふ鐵壺めきたるが、顔尖りていと瘦せたり。身には溷鼠染とかいふ袴の單衣のふりたるを、棲はさみして、頭には白菅の笠を戴き、項には頭陀袋を掛けたり」とあり、貧乏神は法師の姿で表わされている。この貧乏神譚の内容は、文政四年夏の頃、武家の用人が主用で下総のほとりに行く途中、草加の宿のあたりでこの法師

に会う。用人が僧にどこから来たのかをきいたところ、「私は番町の某の屋敷より越谷へ行く」と答えた。その屋敷は主の屋敷であったので、用人は「私はその屋敷の用人である。普段見ない人が、なぜ私の屋敷にいるというのか」と怪しんで聞くと、「私は世に言う貧乏神である。私は三代前からあなたの主の屋敷にいる。だからその家は不幸があり貧しいが、家が滅びなかったのは先祖の遺徳のおかげである」という。その他にも家の秘密のことを話すので用人は恐れていると、窮鬼は「恐れることではない。私は他所に移ることにしたので、これよりあなた的主はさかえ、借財も返すだろう」という。どこへ行くのか尋ねると、「某の家である。その家は貧窮していくだろう」といった。その後この屋敷は、借財も返し、思うより多くのものを得たということだ、というものである。さらにこの後、中国における「窮鬼」の習俗、その存在などを説明し、日本でいう貧乏神とは中国の「窮鬼」のことだ、と断言している³⁴。

『兎園小説』の貧乏神譚は、貧乏神の漢名とされる「窮鬼」が題となっていることから明らかなように、中国の影響を多分に受けたものである。また、「貧乏神が家を移るときに、主人公が貧乏神に出会い、貧乏神が新たな行き先を予言する」という内容になっているが、これに酷似した話は中国に存在する。

中国においては、人を不運にさせる小鬼のような存在を「窮鬼」
 『兎園小説』では貧乏神と同一の存在とする）と呼んでいる。
 韓愈の「送窮文」や伝南宋張致和撰の『笑苑千金』には「窮鬼」
 という名称がみえる。また、唐張讀撰の『宣室志』⁽⁵⁶⁾には、「兎
 園小説」と類似した話で、「窮鬼」という名称でこそないものの、
 人を困窮させる存在が登場し、主人公は困窮するが、のちに他
 者のところに移り、運勢が変わるという話がある。これらのこ
 とから、『兎園小説』における貧乏神は、滝沢馬琴や琴嶺興繼
 といった当時の知識人が中国の貧乏神譚を改作したものである
 といえるであろう。

(三) 貧乏神譚の共通点と変遷

◎ 貧乏神譚の推移

これまでのように貧乏神譚を整理していくと、貧乏神にはお
 およその貧乏神譚に共通する要素と、逆に時代ごとに変化する
 部分があり、そこから話型を分類することができそうである。
 共通する要素を一点だけ指摘すると、近世前期以前に登場し
 た貧乏神のほとんどは、夢の中で登場することである。『発心集』
 では「シバシヨリフシタル夢」、『沙石集』では「其夜ノ夢」ま
 た「他國へ落行ムトシケル夢」、『因縁集』では夢と明言はして

いないが「有ル夜ノ明方」に貧乏神が来たとしていて、もとは
 夢であったことを暗示させる。

『醒睡笑』では貧乏神が落ちてきたのは「壁にもたれ居いね
 ぶりしけるみぎりかた」からで、その後「目をさまし」と、こ
 こでも夢を暗示する表現がなされる。井原西鶴の浮世草子「日
 本永代蔵」でも「御霊夢」に貧乏神が現れ、さらに『譚海』で
 も貧乏神が出てくるのは「晝寝せし夢」であった。このように、
 貧乏神と夢はもともと切り離せないものであったようである。
 民俗学において、夢は霊的存在の来訪であり、夢の内容は霊的
 資質を持たない人々による広義の占いであると解釈されてき
 た。つまり、夢の御告げは神霊が何らかの情報を与えるもので
 あり、貧乏神もまたこうした神霊と同様に扱われていたことが
 うかがえる。

一方で表1は、貧乏神譚を時代順に並べ、「結果」「名前」「出
 没場所」「時期」という要素をまとめ、それぞれの貧乏神譚の
 内容から「追跡型」「福神入替型」「追出失敗型」「祀り上げ型」
 「追出型」「焼味噌型」「家移型」という話型名を付し、示した
 ものである。話型の名称は便宜的につけたものであり、その内
 容には重複する部分もある。

まず貧乏神が語られたしたのは主に仏教説話においてであっ

表1 管見の限り確認できた貧乏神譚をまとめた表。本稿での貧乏神の定義に沿わないものや、俳諧、連歌、狂歌といった類、また、貧乏神譚として成り立たないものは除外した。

	結果	名前	出没場所	時期	追跡型	福神入替型	追出失敗型	配り上げ型	追出型	焼味増型	家移型
売心集 (1214頃)	貧	貧報ノ冠者	夢		○						
沙石集 (1279-1283)	富	貧報ノ冠者	夢、寺	十二月晦日ノ夜					○		
沙石集 (1279-1283)	不明	貧報ノ冠者	寺	有ル夜ノ明方	○						
因縁抄 (中世?)	不明	貧報神	里場		○						
大乗院寺社雜事記 (1483)	不明	貧法神	道(?)			○					
梅津長者物語 (左近永系) (室町後期)	富	ひんぼう神	富			○					
梅津の長者 (小藤永系) (室町後期)	富	ひんぼう神	家			○					
妙山問答 (1605)	貧(?)	貧法ノ神	会話中	会話中		○					
南睡笑 (1615頃)	貧	貧乏神	自身			○					
古今百物語評判 (1686)	貧(?)	貧乏神 (窮鬼)	枕元	七種の夜(?)		○					
日本永代蔵 (1688)	富	貧乏神				○					
初音草庵大鑑 (1698)	貧	貧乏神	寺	夕暮		○			○		
経口御前男 (1715頃)	富	貧報神				○					
説話仕形術 (1773)	貧(?)	ひんぼう神 (びんぼう神)				○					
出願題 (1773)	貧	ひんぼう神	戸棚の上			○					
さとしめ (1777)	貧(?)	びんぼう神	寺 (推定)			○					
課義 (1777)	不明	貧乏神				○					
闇の囃 (1789)	富(?)	貧乏神 (食渴神、貧欲神、障礙神)				○					
課晦 (1795)	富	貧乏神	夢、家			○			○		
按古於當世 (1807)	不明	貧乏神		毎月晦日に私う		○				○	
稽古談 (1813)	富(?)	貧乏神	家			○					
耳袋 (1814)	富	貧乏神				○					
夷圖小説 (1825)	富	貧乏神 (窮鬼)	道中	夏のころ							○
夜窓鬼談 (1889)	貧	貧神 (貧乏神)	小路	日既昏							○

た。その内容は、主人公が貧乏神から逃れようと引越しや旅の支度をするが、何らかの理由で貧乏神が後を追ってくるのが判明し、貧乏神からは逃れられないことを悟り、逃亡を諦める、という内容で、これを「追跡型」とした。しかし、時代が少し下ると、貧乏神が出て行き福神が入ってくる、もしくは貧乏神と福神を入れ替えようとする「福神入替型」の話が現れる。そして、貧乏神を追い出そうとしたが不可能であったり、追い出したと思ったが追い出せていなかったりという「追出失敗型」へと続く^⑧。その後、文学作品の中に見られたものではあるが、追い出される存在から「貧乏神」として祀り上げられる存在となり、ときにはその貧乏神が福を授けるという内容の「祀り上げ型」が登場する。しかし今度は、貧乏神を何らかの方法で家から追い出そうとする「追出型」がみられるようになり、その一部は貧乏神が「焼味噌」を好むという性質から「焼味噌型」として位置づけた。さらに『兎園小説』以降は、当時の知識人が中国の窮鬼を貧乏神に当てはめ、家を出ようとする貧乏神と主人公が出会う「家移型」へ続くのである。

ただし、仏教説話の『沙石集』にある「追出型」は前述とは異なる変化をしている。因果応報を説明するために語られてきた仏教説話の貧乏神譚では、貧乏神は因果により離れないこと

が普通である。しかしこの話では貧乏神は追い出されている。その点において、この話は当時の仏教説話のなかでも、非常に特異なものであるということが出来る。そうなった理由として、圓淨房の呪や「眞言ノ習敷、若ハ陰陽ニ付タル法」そのものを讀え、因果であつても貧乏が離れることもある、という宗教側の宣伝があつたことが考えられる。また、『沙石集』の作者が「貧窮モ前世ノ業ニテ、佛神ノ助モ叶ヌ事ニテコソ、多ハアルニ、不思議ナリケル事ニコソ」と語っていることをみると、この話自体が本来の仏教論理から外れたものだったからこそ、不思議なこととして書き留められたと推測される。

このように貧乏神譚は時代によって移り変わっており、信仰や民俗に影響されながら再生産されていったことがわかる。

四、結論

本稿では、まず貧乏神が登場する文献を時系列に述べ、その時代ごとの特徴や姿などをまとめた。さらにそれらから要素に分解して考察した結果、「追跡型」から「家移型」まで、変化する内容と話型を抽出することができた。もともと仏教説話で語られていた貧乏神譚が仏教説話から離れることにより、呼称

や性格に変化が生じ、時代が下ると貧乏神は福神の対極と想定され、福神によって降伏させられる、追い出される、という話が現れた。さらに、文学作品の中でも現実でも、神として祀り上げられる存在となっていく。

本稿では管見の限りの文献には当たったが、貧乏神に関する文献そのものが少なく、考察のための貧乏神譚の数が十分でないことは否めない。今後の課題として、昔話の貧乏神譚や近代以後の貧乏神譚、信仰などについても視野に入れ、さらに日本人の貧乏神に対する観念について考察していきたい。

注

- (1) 加藤まどか「貧乏神伝承の構造」『國學院大學大学院文学研究科論集』第三七号、國學院大學大学院文学研究科学生会、二〇一〇。
- (2) 大島建彦「疫神と福神」『疫神とその周辺』岩崎美術社、一九八五。
- (3) 宮田登「福の神・貧乏神」『都市民俗論の課題』未来社、一九八二。
- (4) 紙谷威広「福神と厄神」講座・日本の民俗宗教三 神観念と民俗 弘文堂、一九七九。
- (5) 塩川和広「富貴への予言と福神・貧乏神——打出の小槌と柿帷子」『アジア遊学』第一五九号、勉誠出版、二〇一二。
- (6) 塩川和広「お伽草子『福神物』に見る致福の構造——『梅津長者物語』を中心に」『立教大学日本文学』第一一一巻、立教大学日本文学会、二〇一四。

- (7) 服部幸雄「図像の創成——貧乏神と和合神——」『文化学研究』第一〇号、日本女子大学文化学会、二〇一。
- (8) 小松和彦「福の神と貧乏神」筑摩書房、一九九八。なお貧乏神についての考察の補足が筑摩書房の月刊誌『ちくま』に「貧乏神と福の神の複雑な関係」としてなされている。また、これと同様の内容のものが、小松和彦「福の神と貧乏神」文庫版、筑摩書房、二〇〇九、「文庫版あとがき」に紹介されている。月刊誌『ちくま』にあるものは巻数不明により確認することができなかったため、本稿では「文庫版あとがき」を参照した。
- (9) 『鴨長明全集』貴重本刊行会、二〇〇〇。慶安四年板本第七「三井寺僧夢見貧報事」によった。
- (10) 『日本古典文学体系八五 沙石集』岩波書店、一九六六。底本は梵舜本。「貧窮ヲ追タル事」によった。
- (11) 『因縁抄』古典文庫、一九八八。同書によった。説明は同書巻末にある阿部泰郎氏の解説をもとにまとめたものである。
- (12) 『室町物語小説集』精華書院、一九〇八。元本土佐廣澄筆「梅津長者物語」によった。
- (13) 喜田貞吉「毘沙門天王考」『福神研究』日本學術普及會、一九三五。ここには、「殊に此の神が他の福神とは違って、ひとり軍神であるといふことから、貧乏神退治の功德あるものとして信仰せられた意味もある」として、毘沙門天側から、毘沙門天と貧乏神の関わりが書かれている。
- (14) 江戸時代前期に刊行された、早大図書館所蔵『ゑびす大くかつせん』には「ふくの神の、いさかひは、ひんほう神の、いさはひなり」とある。(『室町時代物語大成 第三』角川書店、一九七五。「ゑびす大くかつせん」によった)
- (15) 『日本思想体系二五 キリシタン書排耶書』岩波書店、一九七〇。「妙

- 貞問答」によった。
- (16) 『室町時代物語大成 第二 角川書店、一九七四。清水泰氏旧蔵「梅津の長者」』によった。
- (17) 『新日本古典文学体系三五 今昔物語集三』岩波書店、一九九三。巻第十六本朝付仏法「隱形男依六角堂親音助顯身語第三十二」によった。
- (18) 『國文東方佛教叢書 文藝部上』國文東方佛教叢書刊行會、一九二六。「雄長老百首」によった。
- (19) なお、貧乏神と神無月の関わりは、編者不詳の明応八年（二四九九）の俳諧集『竹馬狂吟集』に「かへるなよ我がびんばふの神無月」とあり、既に言葉遊び的に表れている。神無月に出雲へ行った貧乏神が帰ってこないことを願う句であり、『雄長老狂歌百首』の「初冬」とは異なる内容となっているが、貧乏神が帰るかは不明の句であり、貧乏神の離れにくさが暗示される。『竹馬狂吟集』は『新潮日本古典集成 第七七回』竹馬狂吟集 新撰犬筑波集 新潮社、一九七八。「竹馬狂吟集 卷第四」によった。
- (20) 『醒睡笑静嘉堂文庫蔵本文編』笠間書院、一九八二。同書によった。天文三年（一五三四）に景聡興易により著された『虚堂録假名鈔』には既に「貧乏神」の表記がある。後述のように「貧乏」という語は当時から用いられており、不思議ではない。（『虚堂録抄 九・十』岩波書店、一九七七。「虚堂録假名鈔」によった）
- (21) 断片的な文献として『大乘院寺社雜事記』の文明一五年（二四八三）六月二日の記事に「實法神」の表記があり、別の場所の「福天」と入れ替わる。（『大乘院寺社雜事記』は『大乘院寺社雜事記 第八卷』三教書院、一九三四。同書による）また、慶長一〇年（一六〇五）に書かれた『妙貞問答』では、「貧法ノ神」の表記がある。（『妙貞問答』は『日本思想体系二五 キリシタン書 排耶書』岩波書店、一九七〇。同書による）基本的には「貧報」から「貧乏」へと変化しているが、
- (22) 移行期には様々な宛字や平仮名表記が行われている。
- (23) 中田祝夫『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引』勉誠社、一九七九。同書によった。
- (24) 仏教説話にとどまらず、仏教に影響を受けた物語には、例えば『熊野の本地の物語』に「このさうしを、もちえさる物は、こんけんの御にくみを、かふむりて、ひんくうの、ほうをうけ、こせには、あくたうへ、おつるなり」とあるように、貧しさは報いであるという認識は広く確認されていた概念だったといえる。（『熊野の本地の物語』は、『室町時代物語大成 第四』角川書店、一九七六。天理図書館蔵「熊野の本地の物語」によった）
- (25) 仏典にも『大般若波羅蜜多經』卷第五百六十八第六部念住品第五に「諸有情類多有貧乏飢寒困苦」とあるなど「貧乏」の語が用いられることはあるが、報いである、という側面を主題とするならば、「貧報」の表記が尤もとされたのであらうと考えられる。（『大正新脩大藏經 第七卷 般若部三 大正一切經刊行會 一九二四。『大般若波羅蜜多經之第三六會 念住品』によった）
- (26) これに沿わない特異なものとして、正徳五年（一六八八）頃の『軽口御前』がある。これは上方の芸人が話した笑話であり「貧報神」という表記があるものが二話ある。一部においては未だ「貧報神」の表記が細々ながら続いていたことが推察されるが、何故にこの表記が残ったかは不明である。
- (27) 『假名草子集成 第二十九卷』東京堂出版、二〇〇一。「古今百物語評判」によった。
- (28) 『新潮日本古典集成（第九回） 日本永代蔵』新潮社、一九七八。「折る印の神の折敷」によった。
- (29) 文献上においては、これ以前には貧乏神が疫神と近縁のものとして認識されることはほとんどなかったため、それまでは全く別であったも

のが、好まざる神、という認識で混同され、この時代になってはじめて近縁のものとして認識されたと考えるべきであろう。特に混同された場も『日本永代蔵』がはじめであるとすれば、娯楽作品ゆえの滑稽さやわかりやすさのため、意図的に近縁となされた可能性も否定できない。

- (30) このように叱りつけの文句や悪口として、特定の人物に対して「貧乏神」という用例は管見の限りではこれが初出であり、この辺りの時代から始まった用法と推測される。

- (31) 『譚叢』は「軽口御前男」内の一話と似た内容であるものの、贅沢品が嫌いという特徴はみられない。後世にもそこまで影響を与えていないことから、必ずしも貧乏神に必要な特性ではなく、創作物としての印象付けとして、この性格を付与したものと思われる。『譚叢』は、『断本体系 第十一卷』東京堂出版、一九七九。『譚叢』によった。

- (32) 中田祝夫・小林祥次郎『改訂新版 書言字考節用集研究並びに索引』勉誠出版、二〇〇六。同書によった。

- (33) 『書言字考節用集』には貧乏神の項目にも「貧乏神 号黒闇天女」と、貧乏神と黒闇天女を同一とする記述がある。『書言字考節用集』は、中田祝夫・小林祥次郎『改訂新版 書言字考節用集研究並びに索引』勉誠出版、二〇〇六。同書によった。

- (34) 『大般涅槃經』などに説かれる。北涼曇無讖訳『大般涅槃經』大般涅槃經卷第十二聖行品第七之三に「復於門外更見一女。其形醜陋衣裳弊壞多諸垢膩。皮膚皴裂其色茭白。見已問言。汝字何等。答曰。我字黒闇。復問。何故名爲黒闇。女人答言。我所行處能令其家所有財寶一切衰耗」とある。〔大正新脩大藏經 第十二卷 寶積部下涅槃部全〕大正一切經刊行會、一九二五。『大般涅槃經卷第十二 聖行品七之三』によった。

- (35) 寛永をやや降る頃の刊行と推定されている丹緑本『強盜鬼神』には、

「しかるに、このか、み、一夜のうちに、行かたしらす、なりにけり、俱生神、司命司録神、黒闇天女、太山府君、断陀童に、いたるまで、ことごとく、よりあひて、いか、せんと、ひやうぢやうしけり」と、地獄にいる存在として書かれている。また、「佛説地藏菩薩發心因縁十王經」には「右黒闇天女幢左太山府君」と、閻魔王国について書かれた箇所とその名がみえる。名前はある程度知られていた存在であったと推測される。〔強盜鬼神〕は、『室町時代物語大成 第四』角川書店、一九七六。国会図書館蔵「強盜鬼神」によった。また、『佛説地藏菩薩發心因縁十王經』は、『新纂大日本續藏經 第一卷』国書刊行會、一九八〇。『佛説十王説』によった。

- (36) 『日本隨筆大成(第二期) 一二』吉川弘文館、一九七四。『闇の曙』によった。

- (37) 矢部善三『神札考』では、『白家祭式秘卷』にある「貧神祭」の記事を引用している。これによると、貧神祭は貧ノ神送りであり、除夜、もしくは臨時に行い、人形を三つ作り、人形に貪欲神、飢渴神、障礙神と書き付けて船にのせ、古い破れ団扇にのせて竈の上に、けがらわしくさみしく祀り、祀り終えたら川へ流し捨てるという。川が近くになければ町外れでも良く、必ず道を変えて帰ることが示される。この神は三愚神といい、サグシと読むとし、祭儀は口伝である旨が書かれ、祭儀に用いる祝詞も記されている。しかし、これらの記述があることとされる『白家祭式秘卷』は管見の限り探すができず、成立年代も不明であるため、本文では扱わないこととした。『闇の曙』にある記述と類似していることから、『白家祭式秘卷』は『闇の曙』にあるような祭儀を記したのかと思われる。〔矢部善三「神札考」素人社書屋、一九三四。同書によった〕

- (38) 『譚海』国書刊行會、一九一七。同書によった。

- (39) この時代までに刊行された、黄表紙に描かれる貧乏神の姿と、相互に

- 影響を与えた姿と考えられる。
- (40) 『沙石集』には「眞言ノ習歟、若ハ陰陽ニ付タル法ヲ知タリケルニヤ」とある。
- (41) 平野雅章『食の風俗民俗名著集成／第七巻 醤油味噌の文化史』東京書房社、一九八五。同書には他にも「生味噌食うと貧乏する」「焼きみそ焼くと金が逃げる」など、生味噌や焼味噌を嫌がる諺が載る。
- (42) 平野雅章『食の風俗民俗名著集成／第七巻 醤油味噌の文化史』東京書房社、一九八五。生味噌や焼味噌を嫌がる諺とともにその理由として、味噌の浪費につながる旨が書かれている。
- (43) 『警喻盡並二古語名數』同朋社、一九七九。同書によった。
- (44) 『警喻盡』には諺語のみが書かれ、意味までは載せていない。意味の説明には『警喻盡』からの引用である旨が記されている、『日本国語大辞典 第十九巻』小学館、一九七六。同書にあるものを参考として用いた。
- (45) 『海保青陵集』誠文堂新光社、一九三五。「稽古談巻三」によった。
- (46) 『海保青陵集』誠文堂新光社、一九三五。「論民談」によった。
- (47) なお同書には「京ニモ江戸ニモコノ式ナシ」ともあるため、かなりの地域性がある習俗であったといえよう。
- (48) 『耳袋一（全一卷）』平凡社、一九七二。「貧窮神の事」によった。
- (49) 『耳袋一（全一卷）』平凡社、一九七二。「貧窮神の事」の本文「近ごろ天神境内に社祠出て来ぬるを」やその註釈（鈴木棠三氏による）、また実際にそれとおもわれる社が境内にあることなどから判断した。
- (50) 後述の説明板や、『風俗畫報』第四百五拾壹號、東陽堂、一九一三。同書の漢紋字彙による「小石川の貧乏神」から判断した。
- (51) 『芸能の神・福の神 太田神社』と題された看板で、東京都文京区教育委員会により、平成元年三月に建てられたものである。短いので全文を引用する。「芸能の神・天鈿女命と、道の神・猿田彦命をまつる。

- 人々の信仰厚く、関東大震災のころまでは、祭りの日ともなると、未明から深夜まで参詣の人でにぎわったという。芸能の神として、歌舞伎、新劇人など芸能人の信者を集め、名のある役者がたびたび参拝に訪れた。なお、この神社はもとは貧乏神といわれた黒闇天女（弁財天の姉）をまつっていたが、江戸のころ、この近くに住む貧乏旗本の窮状を救ってからは、福の神として庶民の信仰を集めるようになったという伝説が残っている。合祀の高木神社は、旧・第六天町（現・小日向一丁目）にあった五穀豊稔の神である第六天社を、道路拡張に伴い、ここに移したものである。」
- しかし、『耳袋』の記録を見る限り、もともと「黒闇天女」を祀っていたわけではなく、『耳袋』にある事件が起きた後に「貧乏神」を祀り始めたと思われる。また、看板では黒闇天女を弁財天の姉としているが、一般的には本文の通り、吉祥天の妹である。
- (52) 『日本随筆大成』日本随筆大成刊行會、一九二八。「窮鬼」によった。
- (53) 『日本随筆大成』日本随筆大成刊行會、一九二八。「窮鬼」によった。
- (54) なお、天文三年（一五三四）に成立した、禪籍の注釈書である『虚堂録假名鈔』（『虚堂録抄 九十』岩波書店、一九七七。「虚堂録假名鈔」による）には「窮鬼ハ貧乏神也」とある。また、前出した『古今百物語評判』にある問答形式の話の解説にも「此神を窮鬼と名付たり」とあり、貧乏神に似た中国の故事の解説も載せる。以前より「窮鬼」を「貧乏神」とする認識はあったと思われる。しかし『鬼園小説』にあるものとは違い、『虚堂録假名鈔』のもののはあくまで禪籍への注釈であり、『古今百物語評判』のものも、話の内容自体はそれ以前の『雄長老狂歌百首』や『醒睡笑』のものを引き継いでいる。そのため、『鬼園小説』とは異質のものであるといえる。
- (55) 『送窮文』は韓愈『韓昌黎集』臺灣商務印書館、一九六八。「笑苑千金」は『中国古典文学大系第五九巻 歴代笑話選』平凡社、一九七〇。「笑

苑千金」によった。

(56) 『文淵閣四庫全書 第一〇四二冊』臺灣商務印書館、一九八五。「宣室志卷六」によった。

(57) 注釈書のため表からは除いたが、「福神入替型」を想起させる早いもので、天文三年（一五三四）に景聡興島によつて著された『虚堂録假名鈔』が挙げられる。「貧ボウノ神サヘ吾ヲバイヤガルト也況ヤ福神ヲヤ」とある。（『虚堂録抄 九・十』岩波書店、一九七七。「虚堂録假名鈔」によった）また連歌では、天文五年（一五三六）に荒木田守武によつて著された『飛梅千句』が挙げられる。「ふくの神びんばう神をつれられてなど大こくをかたらはざらん」とある。（『古典俳文学大系一 貞門俳諧集一』集英社、一九七〇。「守武千句」によった）

(58) 『妙貞問答』は、貧乏神を福神と入れ替えようと神主に相談したが、巧みな言葉により断られる、即ち失敗するという内容であるため、表では「福神入替型」と「追出失敗型」の両方に該当するものとした。